

## (2) 優秀賞

### 〈課題研究部門〉

- ・ 課題研究部門②遊びと学び

3歳児の遊びと学び「むしのせかい」

白井 元子 (京都府・ひいらぎこども園)

- ・ 課題研究部門③子どもの健康・安全

新型コロナウイルス感染症流行期における「健康教育」～「いのちをまもる」～

藤井 瑠美(東京都・葛西大きなおうち保育園)、佐藤 尚穂(東京都・船堀中央保育園)

### 〈自由研究部門〉

1人ひとりの個性やこだわりを大切にすること—子どものあそびへの  
関わりから見えてきたもの—

鶴見 京子、浅香 聡彦 (石川県・大徳学園)



## 課題研究② 遊びと学び

### 3歳児の遊びと学び「むしのせかい」

京都府・ひいらぎこども園 白井 元子

#### 1 はじめに

本園では、「心やさしくたくましく」を保育目標に掲げ、子どもの「やってみたい!」という気持ちと「体験」を大切に、教育・保育を展開している。目指す子ども像は、「①やさしくたくましい子②自分も人も大切にする子③発見や工夫を楽しむ子④自分で考え、自分で行動する子」である。

昨年度3歳児を担当し、一人の子どものダンゴムシ発見をきっかけに、クラスの子どもたちが虫や自然物に興味を持ち、それぞれがおもしろいと思ったものをじっくりと観察し、五感を働かせて大人が気づかないような細かいところまで見つけ出す姿に驚かされた。さらに、子どもは、発見したことを興奮しながら友達や保育者に伝え、そこに集まった友達は、共に驚き、さらに新たな発見をしようと一緒に目を見開き、時間を忘れて夢中で探究の世界に入り込んでいく姿が見られた。

幼保連携型認定こども園教育・保育要領第2章における「満3歳以上の園児の教育及び保育に関するねらい及び内容」の「環境」領域には「周囲の様々な環境に好奇心や探究心をもって関わり、それらを生活に取り入れていこうとする力を養う。」とあり、ねらいとして(1)身近な環境に親しみ、自然と触れ合う中で様々な事象に興味や関心をもつ。(2)身近な環境に自分から関わり、発見を楽しんだり、考えたりし、それを生活に取り入れようとする。(3)身近な事象を見たり、考えたり、扱ったりする中で、物の性質や数量、文字などに対する感覚を豊かにする。と述べられている。

本研究では、子どもが自然環境に好奇心や探究心をもって関わり、それらを生活に取り入れていこうとする力を養う上で、友達の共感や伝え合い・教え合いが大きく影響していることに着目した。

#### 2 研究の目的

- ① 指導計画に柔軟性をもたせ、子どもの願いに沿って、自然の中で納得がいくまで繰り返し遊びこむ体験が、子どもの自然への興味・関心や、発見を楽しむ気持ちを育み、感性を豊かにすることを確認する。
- ② 子どもが発見したことをもとに、探究心や、工夫する力を育むためには、友達や保育者の共感が重要であることを実践の中で明らかにする。

#### 3 研究の方法

研究の期間 令和2年4月2日～令和2年11月19日  
対象児童 ひいらぎこども園 紫組(3歳児) 16名  
研究の方法 実践記録をとり、記録をもとに考察する

#### 4 実践の経過

##### (1) 指導計画

テーマ「むしのせかい」

ねらい ①自然にふれ、興味をもって関わる。

②好きな遊びを見つけて繰り返し楽しむ。

③自然を取り入れて、遊びを楽しむ。

内容 ①身近な虫や植物に関心を持つ。(環境)

②友達のしていることに興味を持ち、やってみようとする。(人間関係)

③楽しかったできごとなど、自分の言葉で相手に伝えようとする。(言葉・人間関係)

④いろいろな虫に興味を持ち、不思議に思ったり発見したりする。(環境)

⑤友達と協力をし、作ったり飾ったりすることを楽しむ。(表現・環境・人間関係・言葉)

##### (2) 実践記録

##### むし大好き①

4月、中庭のくすのきの下でA児がダンゴムシを発見してから、クラス全員が様々な虫に興味を持ち始めた。朝、「今日は何したい?」と聞くと、毎日、子どもたちから「むしとりにいきたい!」「むしつかまえて!」という声があがるため、園庭だけでなく隣接するお寺へも足をのびした。

5月18日(月)B児の「今日もお寺に行こう!」という声のもと、お寺に出かけた。子どもたちは、どこにどんな虫が隠れているか、なんとなくわかってきたので、いつもの草の中や岩の下、葉っぱの中を探していた。C児が地面をじーと見つめていると何か動くものを発見!(写真1)大きなアリだ。みんなが集まり「あれ?なにかもってるよ」「いもむしや!」「羽かな?」「どこへいくのかな?」「ごはん運んでいるんや!」「巣の中に入った!」とアリの動きをずっと観察していた(写真2)。アリは体の何倍もの大きさの餌を運んでいて、子どもたちはその動きに見入っていた。



(写真1)



(写真2)

考察① 子どもの願いに沿って日々の活動を決め、自然の中でやりたいと思った活動をくり返し体験することによって、どこに虫がいるのか感覚的に身に付けることができるようになっていく。また、C児の発見のエピソードからは、友達と発見を共有し、考えを出し合うことによって、「いもむし・羽・ごほん・どこへ？」といった多様な考え方に触れることを楽しみ、さらに興味関心が深まっていく様子が読み取れる。

#### むし大好き②

6月15日(水) やっと雨がやみ、「やった～！虫とりに行けるー！」と子どもたちは大喜び。部屋からも、セミの声が聞こえるので、「どこにいるのかな？」と声をたどってお寺へ行った。すると、さっそく、D児が柿の木の葉っぱにセミの抜け殻を発見(写真3)。下を見てみると、生きているセミを発見！「わーせみや！」と大興奮！順番に見たり、触ったりして「ちくちくするな」「どこ持つの？」と、発見を共有し、セミの持ち方を教え合いっこしていた。

次の日から、網や虫かご・図鑑を持って毎日のお寺に通った。子どもたちは「昨日いた場所にまたいるかもしれない。」と探しに行き、大人よりも早く発見し、抜け殻を集めて「どれが一番大きいかな？」と大きさを調べたり、自分がとった虫をみんなに発表したりしていた。

さらに、子どもたちは、お腹の色にはオレンジと白があること、鳴いているセミと鳴いていないセミがいること、緑の羽のセミと茶色の羽のセミがいることを発見した。図鑑で調べて、『お腹がオレンジなのはオス、白はメス』『緑で透明の羽はクマゼミで、茶色はアブラゼミ』であることを知り、次から捕まえるたびに、「これはオレンジやしオス。」と、友達同士教え合う姿が見られた(写真4)。

保育室に、常に虫の絵本や図鑑を置いておいたこと



(写真3)

により、友達と一緒に調べたり(写真5)一人でじっくり見たりする姿がみられた。



(写真4)



(写真5)

考察②「セミの声に誘われて、ワクワクしながらセミさがしに行く」という子どもの願いに沿った活動が、次々と新しい発見を生み出している。体験をもとに虫の居場所を予想したり、大きさ比べをしたりするなどの活動も生まれ、思考力・判断力の基礎が育ってきていることが読み取れる。さらに、思ったことや疑問を自由に出し合い、自分の考えを表現し、友達の考えを聞いて刺激をもらうことによって、興味関心が広がり深まりを増していっていることがわかる。また、探究のための保育室の環境も重要であることを、このエピソードは示している。

#### 季節の変化を感じる①

10月14日(水)「秋を探しに行こう！」とお寺に出かけた。夏のセミ採り以来なので、「(柿の葉を見て)黄色くなってる！」「葉っぱ、いろんな色が混ざってる」「どんぐりの赤ちゃんや！」「(はっぱを見つけて)ギザギザだね」「つるつるしてるよ」「ちくちくして痛い！」(写真6)と触った感触も楽しみながら、多くの発見をしていた。桜の木を指さしE児が「上の方(の葉っぱ)が赤いな～」と言っていた5日後、また同じところで遊んでいると、「なんか真ん中と下の方も色が変わってる！」(写真7)と変化に気づいた。ずっと同じところで遊び続けたことによって、季節の変化と共に、日々の小さな変化にも気づくようになった。



(写真6)



(写真7)

季節の変化を感じる②

10月30日（金）お寺に遊びに行き、F児とG児が落ちている葉っぱを拾い、「黄色いはっぱ！」「半分で色が違う！」「こっちとこっち（表と裏）で色が違う！」と葉の色の変化に気づいて見せ合いっこをしていた。H児は顔くらいの大きい葉っぱを見つけ、自分の顔にくっつけて「僕の顔とどっちが大きい？」と比べたり、同じくらいの大きさの葉っぱを横に並べて持って「どっちが大きい？」と比べたりしていた（写真8）。すると、I児が「こうやって合わせてみい。」と前後で合わせて比べた（写真9）。



(写真8)



(写真9)

考察③ ①は繰り返し同じ場所で遊び込む体験が、季節の変化を感じさせ、子どもの感性を豊かにしていることを示すエピソードである。②では、発見したものを遊びに使って考察を深めている。葉の大きさ比べにおいて、並べる・合わせる・重ねるなどの方法を友達と一緒に生み出している。様々な比べ方があるということを知り、遊びの中で、子ども同士で刺激し合い学び合っている姿である。友達との意見の交流が、探究の意欲に大きく影響していることを示している。

むしになりたい

10月1日（木）絵本『むしたちのえんそく』をみんなで読んで、J児から「カブトムシになりたい！」という声が上がった。すると、「私はクワガタ！」「僕はダンゴムシ」「ちょうちょがいい」「オニヤンマ！」と盛り上がったので、みんなで変身遊びをすることになった。「何で作ろうか？」と相談すると「画用紙がいい。」という意見が出て、好きな色の画用紙を選んで、ハサミで切ったりテープで貼ったりして、蝶やオニヤンマ、テントウムシなど好きな虫を作り始めた（写真10）。日頃からよく観察しているのので、角や体の模様、羽など特徴をとらえて作っており、納得がいくまで何度も作り直す姿が見られた。1日では完成しなかった



(写真10)

め、数日間、むし作りが続いた。そして、完成したものを身に付けて虫になりきって遊んだ。（写真11・12）



(写真11)



(写真12)

考察④ 子どもたちの興味関心に合った絵本を選択し、お話を楽しむ中で出てきた子どもたちの願いから表現遊びが展開していったエピソードである。自然の中で思いっきり遊んだ体験が表現に生き、それぞれが自分の考えや表現に自信を持って、伸び伸びと自分なりの表現を楽しんでいる様子を読み取れる。

むしごっこ①

10月2日（金）絵本『むしたちのおまつり』を読んで、「ジュース屋さん遊びをしよう！」ということになり、色水（赤・青・黄・白）を用意した。最初は自分の思うように色水を混ぜて遊んだ。すると、思いもよらないきれいな色が生まれたり、容器の真ん中で色に変色したりしていくことを発見した。（写真13）「青と赤はどうなるかな？」「メロンジュースになったで。」と何度も試して遊ぶことでたくさんの気づきと発見があった。K児とL児は「緑と緑やけど・・・なんか違うな。」と微妙な色の違いに気づき（写真14）、M児は「オレンジジュースは赤と黄色入れるねん。」と何度も試す中で混色のルールを発見して、本物そっくりの色のジュースを作って遊ぶ姿が見られた。

さらに、作ったジュースを並べてお店を開き、ペットボトルのキャップを氷に見立てて「いらっしやいませ。」「どうぞ。」と友達とあげ合いする姿も見られた（写真15）。



(写真13)



(写真14)



(写真15)

考察⑤ 一人ひとりが思い思いの混色を試す中で、新たなことに気づき、その気づきを友達と交流する中でますます面白くなり、さらに友達とイメージを共有してジュース屋さん遊びへと展開していったエピソードである。友達と一緒にやりたいことに没頭する体験が、子どもたちの興味・関心を高め、発見を楽しむ気持ちを育んでいる。

#### むしごっこ②

10月5日(月) 虫ごっこをしていた時に、「虫さんってどんどこに住んでいるのかな？」という声があり、「草の中にいた!」「お花も好きや。」「蝉は木にいたで。」「葉っぱも食べてる。」「土の中にもいるんやで。」と、春から今までに出会った虫のことを思い出しながらたくさんの意見が出てきた。「そしたら花作りたい!」「草も作ろう!」「木も作ろう!」と盛り上がり、道具をそろえて草や木を作ることになった。

次の日、大きな長い紙にローラーで草を表現したり(写真16)、大きな段ボールを見つけてきて(写真17) 絵の具を塗ったりしていった。塗っているうちにだんだんダイナミックになり、手も足も顔も絵の具だらけになった。心も体も解放し、全身で絵の具の感触を感じて遊ぶ姿が見られた(写真18)。



(写真16)



(写真17)



(写真18)

むしたちシリーズの絵本に親しみ、絵本の世界の虫ごっこ体験を重ねる中で「虫の世界を作ろう!」という声があり、「お部屋にお花をいっぱい飾りたい!」「木を真ん中に置いて、穴をあけて遊べるようにしたらいいやん!」「ジュースとお菓子屋さんも作ろう!」とイメージが広がっていった。

#### むしのせかい①

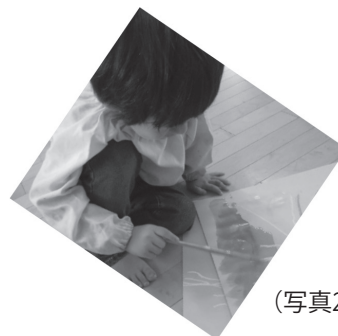
10月19日(月) 前の週に植物公園に行き、たくさんの草花や木の実を見つけたので、花を描くことになった。好きな色の画用紙を選び、紙いっぱいの大きな花や細かく丁寧に描いた花など自分が感じた花々を描いた。「まだ描きたい!」とイメージや思いがあふれ出し、どんどん画用紙をおかわりし、それぞれがそれぞれの感じた形や色合いで夢中になって表現していた。絵具を用意すると、パスで描いた花の絵の線からはみださないように丁寧に着色したり(写真19)、描いていなかったところにも新たに思いついたものを付け足したり(写真20)、画用紙の上で色を混ぜて変わっていく様子を見つめたり(写真21)、「黄色い画用紙の上に紫色で塗ったら黒になった!」など、様々なことを試しながら、多くの発見をしていた。



(写真19)



(写真20)



(写真21)

以前作った草を子どもたちと相談して壁に貼ると、天井まで伸びる草はとても迫力があり、「わー!」と驚きの声があがった。「お花も貼ったらいいやん!」という意見が出て、みんなで描いた花も好きなどころに貼っていくと(写真22)、保育室がむしの世界を感じさせるステキな空間になった(写真23)。



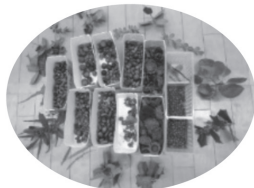
(写真22)



(写真23)

### むしのせかい②

植物公園やお寺で集めた葉っぱやどんぐりを並べて(写真24)、「何して遊ぼうか？」とみんなで話し合った。「上に飾ろうよ！」という意見が出て「どんなふうにする？」と聞くと、N児が「画用紙を貼ってから葉っぱをはるねん。こんなふうにする、見て！」(写真25)と実演して見せてくれ、「虫描きたい」「木も描く」とどんどん様々なアイデアが出てきて思い思いにやりたいことを実現していった。友達の表現を見て刺激を受け一緒に作る姿(写真26)や、自分だけの思いをじっくり表現して楽しむ姿が見られた。



(写真24)



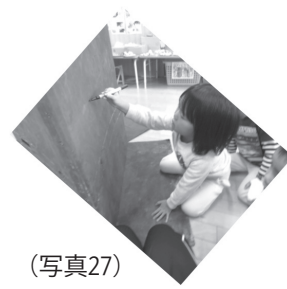
(写真25)



(写真26)

### むしのせかい③

段ボールに塗った絵の具が乾いたので組み立てると、「木のお家にしよう」「ドアもつけよ」「窓もいる！」とマジックで形を描き始めた。O児は「これくらいなら入れるかな？」と扉の大きさを考えて線を描いていた(写真27)。切りとってパカッと開くと、すぐさま友達と一緒に中に入り「みんなもおいでー」と呼ぶ姿が見られた(写真28)。窓を開けて「ヤッホー！」とこんにちがごっこが始まった。また、「木のおうちにも虫をつけたい」と、虫を描いて木にはりつける子どもが出てきて、P児は「ダンゴムシ下の方にいたな。」と実体験をもとに、その虫がいた場所を思い返して貼り付けていた(写真29)。



(写真27)



(写真28)



(写真29)

考察⑥ P児のエピソードは、体験が表現に生き、リアリティーのある作品作りへとつながっていているものである。自然の中でくり返し遊び込んだことによって、体験に裏付けされた知識が備わっており、遊びが学びへと繋がっていていることを表している。

### むしのせかい④

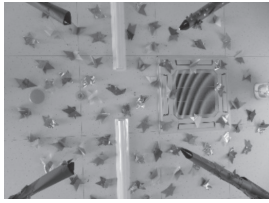
11月5日(木) 木の中に4人で行って遊んでいると薄暗く感じたようで、さらに友達が電気を消すとまっ暗く感じ、Q児が「あっ、お星さまいるな！」とひらめいた。さっそく折り紙と折り紙絵本を取ってきたが、星の折り方が載っていなかった。しかし、子どもたちはあきらめることなく、自分たちでいろんな折り方を何度も試し、「2枚の折り紙を合わせてみると星っぽくみえる！」と星の作り方を創り出し、「まずは△やで。」「できた？次は・・・」と友達と教え合って作り始めた(写真30)。すると次の日から、他の友達にも広がっていき教え合ったり伝え合ったりする姿が見られた。できた星は「星だらけにしよう！」「みんなをびっくりさせよ！」と言いながら天井に貼っていき(写真31)、星空ができあがった(写真32)。寝転んで天井を見上げ、「わー。ほんまのお空みたいやな。」「流れ星みたい！」と美しさに浸っていた(写真33)。



(写真30)



(写真31)



(写真32)



(写真33)

### むしのせかい⑤

11月19日（木）一昨日拾った葉っぱを「木に貼りたい！」という声があがり、両面テープを使って木に貼り付けて遊んだ。両面テープをめくるのは難しいのだが、指先が器用になってきて、根気強く挑戦する姿が見られた（写真34）。上の方に貼りたいたいという友達には「抱っこしてあげる」と、協力して取り組むことを楽しむ姿が見られた（写真35）。葉っぱが貼られ、本当に虫が住んでいそうな世界ができていった（写真36）。



(写真34)



(写真35)



(写真36)

考察⑦ やってみたいなど思いついたことを自由に表現できるのは、何を言っても認めてくれる保育者と仲間がいるという安心感があるからであり、その環境を基盤として4月から培われてきた自由な発想とそれを実現する体験のくり返しが、粘り強さや思いやりの心を育んできたと考えられる。

## 5 考察

虫に興味・関心を持った子どもの姿から、自然を中心に年間指導計画を組み立て、常に子どもの願いに寄り添い、相談しながら活動を展開した。

その結果、考察①にあげた予測する力・考察③の豊かな感性・考察④の自分なりの表現と表現する楽しさ・考察⑤の興味関心の高まりと発見の喜びなどの資質・能力の高まりが見られ、一人ひとりのまなざしの先には、いつもおもしろいものが見つかった。

発見をもとに、子どもの探究心や工夫する力を育むには、考察⑦にあげたように「何を言っても認めてくれる保育者と仲間がいるという安心感」が基盤である。その上で、考察①②③にあげたように、友達と意見を交流して多様な考え方に触れることによって、新しい考えを生み出す喜びや楽しさが膨らんでいく。また、考察⑤⑦にあげたように、イメージを共有して力を合わせて遊び込む中で、工夫する力・粘り強さ・思いやり・協調性が育っていく。これが、主体的な遊びが学びへとつながっていく過程であると考えられる。

目指す子ども像を明確にし、綿密な指導計画を立て、園庭や近隣の環境を十分に活用し、用具や材料(虫かご・網・画用紙・絵具等)・資料(図鑑・絵本・写真等)等の環境を適切に整えることにより、子どもは、遊びを次々と展開し、友達の共感や多様な考えを蓄えながら学びを深めていくことを改めて知った。子どもたちが、共通の目標を持って活動を展開していく過程では、保育者は見守り、認めるだけでよい。そこに学びの本来の姿がある。

さらに、子どもの姿を正しく見極め、柔軟に指導計画を見直し、環境設定を行うこと。それこそが、保育の専門性であり、保育の質の高まりにつながると改めて確認した。

### 参考文献

- 1 「幼保連携型認定こども園教育・保育要領の解説」  
内閣府・文部科学省・厚生労働省、フレーベル館、2018年
- 2 「3・4・5歳児子どもの姿ベースの指導計画」  
無藤隆・大豆生田啓友編著、フレーベル館、2019年



## 講評：3歳児の遊びと学び「むしのせかい」

評者：石川 昭義

幼保連携型認定こども園教育・保育要領の「環境」領域に引きつけて、本研究のねらいを位置づけ、子どもの活動の意義を説明している点がよかったです。「むし」をテーマとして、4月から11月までの期間に次々と子どもの遊びが展開され、それらがつながっていく様子が生き生きと描かれています。子どもながらの発見の喜びや探究の気持ちがあまく描かれており、とりわけ、いろいろな場面で「比べる」という行為が自然に取り入れられているところは、3歳児の思考力の芽生えを見て取れるような記述として興味深かったところです。遊びの展開に合わせて図鑑を置いたり、画用紙や絵の具を準備したりと、遊びの楽しさを大きくする保育者の働きかけもよかったと思います。

報告では、10月までの遊びと10月以降の遊びの展開は質的に違うのではないかとの印象を持ちました。また、この実践について、保育者の関わりや環境構成について、振り返りが記載されると良かったと思います。

評者：高木 早智子

研究の目的にきちんと沿った構成内容になっていると思います。文章も読みやすく、内容がよく伝わってきます。昨年度の取り組みを振り返ることで、子どもたちの育ちについての考察も十分に行われている点も評価できます。各エピソードも子ども中心に描かれており、その場面が目の前に浮かぶようです。添えられた写真からも子どもたちが楽しみながら「むしのせかい」を探求している姿を見て取ることができます。とても読んでいて楽しい実践報告でした。惜しいと感じたのは、考察に「保育者は見守り、認めるだけでよい」と

書いておられましたが、子どもたちの探求過程における具体的な保育者の援助や環境構成について、各考察やエピソードからも読み取れることから存在すると思われますし、保育の専門性や質の高まりにおいてその観点に着目することも必要になるのでは、と感じました。ぜひ次回はその観点にも留意した実践報告を作成されることをご期待申し上げます。

評者：馬場 耕一郎

むしの世界に触れることで、子ども達が時間を忘れて夢中に探究の世界に入り込んでいく姿が見られた研究でした。研究の目的に、指導計画に柔軟性を持たせることがあります。柔軟性に気付かれた点は大変良かったと思います。今回の研究を通して、自然を中心に年間指導計画を組み立てられるようになり、子どもに寄り添った実践を展開されたことは、多くの園の参考になると思います。今後も資質・能力が高まるよう、研鑽に励んで頂きたいと願います。

## 課題研究③ 子どもの健康・安全 新型コロナウイルス感染症流行期における「健康教育」 ～「いのちをまもる」～

社会福祉法人東京児童協会 看護師プロジェクトチーム「いのちキラキラ」  
藤井 瑠美（葛西大きなおうち保育園）  
佐藤 尚穂（船堀中央保育園）

### I. はじめに

当法人では、未来ある子どもたちの為により質の高い健康教育が出来るのではないかと考え、2015年に看護師プロジェクトチームを立ち上げた。「将来、自分自身と他者の心身を大切に思い、お互いを認め合える健全な成人になり、その人らしく社会に属することが出来る」ということを目的として、年長児を対象に毎月の健康教育以外にいのちに関わる内容で年に1テーマ設けて活動を行っている。この活動を子どもたちにも親しみやすいよう【いのちキラキラ】と名付け、プロジェクトメンバーが法人内21園の各園を訪問して健康教育を行い、子どもたちに命の大切さを伝える活動を行ってきた。

COVID-19感染症流行前、本来であれば2020年度は、東京オリンピック・パラリンピックの開催予定の年であった。そのため、当初はパラリンピックに着目し、「みんなちがっていいんだよ」と題して、障害を持つということはどういうことかということテーマとして巡回訪問で健康教育を行う計画をしていた。しかし、COVID-19感染症のパンデミックによって今まで行っていた巡回訪問での健康教育が困難な状況となった。

これから多くの困難を乗り越えながら生きていかなければならない子どもたちのために、いのちキラキラプロジェクトでは何が出来るのか、何が必要とされているのかを考えた。そこで、このような社会の状況下の今こそ、いのちの健康教育を継続することができるよう巡回ではなく他の方法を検討することにした。

### II. 背景

今回のパンデミックは子どもたちのすぐ側に迫る脅威となった。そのような中、子どもたちも連日感染症のニュースを耳にしたり、突然新しい生活様式を強いられることとなった。園で過ごす子どもたちの中にも、目に見えないウイルスへの恐怖心をもったり、新しい生活様式へ戸惑いを抱く等、子どもたちの姿にも変化があった。

そこで、いのちキラキラプロジェクトでは、COVID-19感染症流行初期に「いのちをまもる」をテーマに健康教育を行うことを決めた。また、その中でエッセンシャルワーカーについても触れ、社会で様々な人が助け合い、自分も誰かに助けられ、守られている大切な存在であるということを知ること、安心してこれからの日常を過

ごせるのではないかと考えた。

### III. 目的

いのちキラキラプロジェクトでは、「いのちをまもる」をテーマとして、「子どもたちがCOVID-19感染症の恐怖に怯えることなく、自分達にも自分自身や大切な人の命を守る方法があることを知り、前向きに日々を過ごすことができる」を目的に活動を行った。

その中で、今回は①子どもたちへの新たな健康教育内容、②それに対する子どもの気付き、③これからの課題についてまとめたので報告する。

### IV. 方法

#### 1. 健康教育

##### 1) 方法

- ・設定期間：2021年8月～10月
- ・実施者：各園看護師、年長児担当保育士
- ・場所：21園各園
- ・いのちキラキラプロジェクトテーマ「いのちをまもる」
- ・使用教材：オリジナル紙芝居又は動画（以下、紙芝居（動画）  
タイトル 「ありがとうのちまん」  
作：いのちキラキラプロジェクト看護師  
絵：むらた なるみ
- ・流れ：導入5分→動画10分→まとめ5分  
→カードの記入等10～15分

##### 2) 健康教育内容

- (1) 紙芝居（動画）のどちらか各園に合ったものを実施者が選択し、子どもたちが視聴する。
- (2) 子どもたち自身が「自分達にできるいのちを守る行動」について、ハート型のカードに自由に記載していく。その結果を子ども同士で発表し、内容を共有する。
- (3) 子どもたちが考えた内容を記載したハートのカードを掲示等で保護者にも様子を伝え、共有する。
- (4) 健康教育実施後、実施内容について各園看護師がプロジェクトメンバーに実施報告書を提出する。

### 3) 配慮事項

全園共通媒体として、全体の概要、企画書、オリジナル教材である紙芝居（動画）、台本、資料で健康教育の土台を作成した。また、同じ内容で紙芝居又は動画の2通りの媒体を作成し、各園の規模・人数・環境に合わせて実施できるように、選択できるよう配慮した。

各園看護師が実施するにあたり、紙芝居（動画）前の導入や視聴後のまとめの場面で、各園看護師の経験や思い等を子どもたちに伝えている。

### 4) オリジナル教材の内容

#### (1) 紙芝居（動画）の目的

- ①どのような行動を取れば感染症からいのちを守ることができるのか（自分自身のいのちを大切にす  
る行動）
- ②自分のいのちは周りの人に守られているというこ  
とを理解し、他のみんなも同じように大切ないの  
ちを持っているということがわかる（相互に大切  
ないのちを持っているという理解）
- ③エッセンシャルワーカーについて知り、全てのい  
のちが大切に守られている存在であることがわか  
る（社会で守られている安心感）

#### (2) 所要時間：10分程度

#### (3) 内容

園児の「ぴいこちゃん」と、いのちを守ることを教  
えてくれる「いのちマン」というキャラクターが登場  
し、二人のやりとりでいのちを守る物語が進行する。  
ぴいこちゃんが、いのちマンに教えてもらったいのち  
を守る行動をすると、いのちを守るカードのハートが輝  
き、いのちについて子どもたちも一緒に考えていくこ

とができるような構成になっている。

具体的な場面として、①食事前に手を洗う、②新型  
コロナウイルス感染症予防のためにマスクを着用する  
（咳エチケットについて）、③好き嫌いせずにバランス  
の良い食事を摂る、④交通ルールを守る、⑤生活リズ  
ムを整えるといった場面で保育園生活の流れに沿って  
展開する。（写真1）

また、自分のいのちを守るだけでなく、自分の  
いのちは周りの人（エッセンシャルワーカー）に守ら  
れていることも盛り込まれている。自分のいのちを守  
ることと、誰かのいのちを守る行動をしたときに、最  
後の1つのハートを自分で輝かせるという内容である。

## V. 結果

### 1) 健康教育の実施

- ・実施期間：2021年8月～10月
- ・実施園：15園/21園  
（看護師不在籍のため未実施2園 対象園  
児なし2園 今後行う予定2園）
- ・実施者：看護師+保育士  
（看護師不在籍の園で、園長・主任が代行  
した園あり）
- ・対象児：264名

健康教育の内容については、各園の看護  
師が行うことで、その園の状況や子どもた  
ちの様子に合わせて、紙芝居や動画の媒体  
を選定したり、環境を変更し行うことがで  
きた。共通教材、台本を使用したことで、  
同じ内容を子どもたちに伝えることが出来  
た。

写真1



## 2) 子どもの反応

### (1) 紙芝居（動画）について

- ・紙芝居（動画）終了後の言動：「信号は手を挙げて渡る！」「好き嫌いしないで食べる」「早寝早起きをする」
- ・紙芝居（動画）終了後の行動：マスクの付け方をお互いに伝えあう・咳やくしゃみをする際は、腕で鼻や口を覆うなど、見ながら手を動かす等  
子どもたちは、紙芝居（動画）を10分間見続けられる子とそうでない子に分けられた。

10分間見続けられた子については、上記のような反応が見られた。10分間見続けられなかった子は、紙芝居（動画）後の看護師の問いに答えることが出来なかった。

エッセンシャルワーカーについては、子どもたちから意見は出てこなかった。

### 3) 自らのいのちを守る行動をハートのカードに書き込む 子どもたちが書いた内容は、大きく4パターンに分かれた。

- ①紙芝居と同じ内容：何を書いたら良いのか分からない子どもが記載した。
- ②自分で考えた内容：「はさみをもってはしらない」、「物を大事にする」「歯を磨く」「たくさんあそぶ」
- ③他者への思いやり：「おうちでお母さんのお手伝いをする」「兄弟のお世話をする」

「小さい子やおともだちに意地悪しない」「みんなの心をやさしくしてまもる」「人が怪我をしたら助ける」「みんなの思いが叶ってほしい」

- ④その他：職員の見本や友だちの発言を真似して書く、本人の好きなもの、大事な物等の絵を自由に描いていた。

紙芝居（動画）の内容から、上記のように自ら出来ることやいのちを守ることについて考え、オリジナルで自分の考えを記載できた子もいるが、何を書けばいいのか全く分からない子もいた。

例外として、あらかじめ、文字が書けない事やいのちを守る行動を自ら考えることが難しい子がいることを配慮し、子どもたちが考えるであろう内容を予測し、その中から子どもが選びとれるようにカードの内容を選択性に行っている園もあった。しかし、これについては、子どもの考えを自由に表現する機会を奪ってしまう事にもつながるのではないかと、振り返る園があった。

自分自身で考えた行動を書き込む様子については、子どもたちの中でも保育士等の助けがなく一人で文字に出来る、文字は書けるが考えをうまく文字に表せない、考えることは出来るが文字を書くのが難しい、健康教育の内容を理解して考えること自体が難しい等、そういった様々な子ども達の姿が見られた。（写真2）

写真2



左上より  
動画を視聴する様子・発表・記入  
完成した園児の様子・保護者掲示

## VI. 考察

### 1) 子どもの反応

いのちを守る行動を書き込むにあたり、ひとつの傾向がみられた。それは、紙芝居（動画）を集中して見続けられた子は、いのちを守る行動について自ら考え記載することができた。しかし、集中が切れてしまって見続けられなかった子は、紙芝居（動画）の内容を答えられなかったり、いのちを守る行動を考え、ハートのカードに記載することが出来なかった。

子ども達が記載したハートのカードの内容を、いのちキラキラプロジェクトでの子どもの気づきとした。子どもの気づきは4パターンに分かれていて、この結果から紙芝居（動画）の内容の理解度に差があったことが分かる。

子どもの反応や気付きは、紙芝居（動画）を見続けることができる力や子ども個人の理解度や捉え方などによって様々であり、一人ひとりの個別性に合わせた対応を行うことが望ましいと考える。そこで、子どもの個別性に対応した内容で健康教育を行っていくには、子どもの日常の姿を捉えている保育士との連携が重要になってくると考える。いのちキラキラプロジェクトを実施する数日前から、保育の中でいのちキラキラプロジェクトへの興味・関心を引くような話しをするよう担任保育士に依頼したり、実施後にクラスで振り返りを行ってもらったり、普段行っている行動が、命を守る行動に繋がるのだということを伝え、その時その回だけのいのちキラキラによる健康教育にならないようにしていくことが必要である。

### 2) 今後の健康教育について課題

今回の紙芝居（動画）の内容を子どもたちが集中して見続けて、理解できるようにするためには、子どもの集中力の持続時間、興味の向かわせ方等を考慮して作成する必要がある。また、紙芝居（動画）の内容を朝起きてから保育園に来るまでの一連の流れの中で①生活習慣について、②感染予防について、③社会のルールについてを子どもたちの実際の生活に沿ったものとし、子どもたちが自分の行動を振り返りながら一緒に考えることができるようにするとよいのではないかと感じた。

エッセンシャルワーカーについては、紙芝居（動画）の中では伝えられる内容が限られており、子どもたちがメッセージを受け取りづらかったと考えられる。しかし、エッセンシャルワーカーは子ども達にとって、とても身近ですぐそばにある存在である。そのため、紙芝居（動画）で聞くよりも、子どもたちが保育園から帰るときに目につく仕事などを題材にして、自分の街のマップなどを作成して、エッセンシャルワーカーが自分の生活にどのように関わっているのか、守ってくれているのかを自分の生活とリンクさせながら、イメージとして得られるような方法を工夫することも必要であると考え。ここについては、日常の保育の中で保育士が中心となり、別

の機会に改めて行うことも、継続した教育となり、より充実した内容になるのではないかと考える。

また、保護者の中にはエッセンシャルワーカーとして働く保護者が必ずいる。保護者に協力を依頼し、事前に仕事内容について家族と話し合う機会を作ることもできたのではないかと考える。

## VII. 総合考察

このCOVID-19感染症のパンデミック期において「いのちをまもる」をテーマに実施するにあたり、いのちキラキラプロジェクトで計画を始めた時期はCOVID-19感染症流行初期であった。他でCOVID-19感染症に関する教育や教材などがない中で、最善の方法、内容を模索しながらいのちキラキラプロジェクトを進めていった。しかし、そんな中でも、法人内看護師が専門職として今までの経験を活かし、世の中の流れや法人内の子どもの様子を捉え、最も伝えたいことを最も伝わりやすい内容で作成することができた。子どもが身近に感じられる内容とすることができ、日常生活とリンクさせながらイメージしやすい内容になったのではないと思う。

また、今回のCOVID-19感染症においては、エッセンシャルワーカーという社会において重要な役割を果たす人がいることを知ることができた。今回の内容では、子どもたちにメッセージが伝わりづらかったという結果となったが、方法を変えて、常に自分達を守ってくれている人に対する感謝や、思いやりを育む心、社会に対する興味関心を引き出していけるようにしていくことも必要である。

いのちキラキラプロジェクトでは、健康で安全な生活を送る為に自分の身体や健康、ひいては命を守るために必要なことを、①耳で聞いて目で見て学ぶ、②子どもが自分自身で考える、③その内容を自分なりに表現する、という過程を、自分自身の気付きをきっかけに主体的に考えるプロセスを実施することができた。

また、保育所保育指針で、「健康で安全な生活のために必要なことを、クラスで話題にして一緒に考えてやってみたり、自分達で出来たことを十分に認めたりするなど、自分達で生活を作り出している実感をもてるようにすることが大切である」と述べられているように、自分達で考えたことをその後、日常の保育の中で子ども達自身が実践し、周囲の大人や子ども同士で、子ども自身の実践行動を十分に認め合う機会を設けることが必要である。自分達が考えて行った行動が大人に認められることで、ここで行う感染予防行動が「自分の日常の当たり前」となるための動機づけとなり、子どもたちの自信に繋がっていくと考える。

世の中で様々なニュースが日々流れる中で、今回のように死や病気などの子どもにとって怖いと感じるニュースであっても、その時に取るべき自分のいのちを守る行動を実践していける方法を知ること、恐れずに毎日を

前向きに過ごせるようになっていくのではないかと考える。

現在、いのちキラキラプロジェクトは看護師プロジェクトであり、保育園の看護師が中心となり、年長児担当保育士と共に実践している園が多い。「いのち」という生命に関わる教育ということで看護師が中心に実施しているが、「いのち」に関わることは、動植物や食事の場面等子どもたちの身近に多く存在する。

保育所保育指針では、いのちの教育については触れられていない。しかし、今村らは「本格的ないのちの教育は小学校からであるが、その準備段階として、幼児期にある程度のいのちの学びが出来る方が望ましいと考える」と述べているように、子どもたちのすぐそばにあるたくさんの「いのち」を保育士・栄養士・保護者・地域とも共同して、意識的に多方面から継続的に伝え続けていく必要がある。その積み重ねが、子どもたちに「自分のいのちも、お友だちのいのちも、みんなのいのちがひとつしかない大切なものであり、みんなで大切に守っていかなくてはならない」と伝える最も有効な手段であり、日常の中での「いのちの教育」と言えるのではないかと考える。

#### Ⅷ. 今後の課題

今回のCOVID-19感染症の流行により、大人も子どもも社会全体が混乱に陥り、今までの生活の様々な場面で

転換を迫られることになった。しかし、このような機会があったからこそ、子どもたちも感じることや学ぶことがあったとも感じた。これからも時代の流れに即した内容で、その時に子どもが最も考えやすいであろう内容を模索していく。また、多くの姉妹園を持つという強みを活かして、看護師同士の情報交換や協同により健康教育の幅を広げていけるようにしていく。

今村らが「他者の「いのち」を大切にする子どもは、自分の「いのち」も大切にされているという観察から、まず、何よりも私たち保育者が子どものいのちを守るということを心掛けなければならないだろう」と述べているように、私たち保育者が子どものいのちを第一に考え、その強い思いを子どもたちへ伝えていく。いのちキラキラプロジェクトを通して、いのちの大切さや自分のいのちの尊さを感じられる種を撒き続けていくことが私たちの使命である。その種が、これから子どもたちが生きていく上で、自分にとって大切なことは何かを自ら考える糧になるよう伝え続けていく。

#### 引用参考文献

1. 今村光章、2011、いのちを学ぶ保育のありかたを求めて—記述的エピソード法を用いた園内研修の試み—
2. 飯田聡彦、2019、保育所保育指針解説

## 講評：新型コロナウイルス感染症流行期における「健康教育」～「いのちをまもる」～

評者：天野 珠路

コロナ禍における感染予防と保育の充実という「難題」に各園が悩み、葛藤を覚えながら、それでも子どもたちのために工夫し、その成長を支えた保育現場の皆さんに敬意を表します。保護者支援も含め職員間の連携があってこそその日々だったのではないのでしょうか。

本作品は、法人内21園という組織性を活かした看護師たちのプロジェクトチームによる継続的な実践記録です。看護師の皆さんが話し合いを重ね情報を共有したことはもちろん、子どもたちの年齢や発達に応じた伝え方の工夫など保育現場における感染予防策や保健指導がたいへん有意義であることがわかります。特に手作りの紙芝居や動画、オリジナルのキャラクターなどが子どもたちの理解を助けたことでしょう。

看護師不在籍で未実施の園があったことは残念でした。さらなる連携を図りながら保育職と看護職の連携を図り、エッセンシャルワーカーの未来を描いていていただきたいと願います。

評者：石川 昭義

看護師によるプロジェクトチームが、法人内21施設を訪問して年長児を対象に健康教育を行った実践報告です。オリジナルの教材(紙芝居と動画)を作成し、それを教材として健康(いのちを守る)への取組を啓発しました。

紙芝居(動画)のあとで子どもの理解度を確かめるための工夫をした中で、子どもの反応の記述において、「自分の考えを記載できた子もいるが、何を書けばいいのか全くわからない子もいた」「考えることは出来るが文字を書くのが難しい、健康教育の内容を理解して考えること自体が難しい」

など、教材の理解度に差があったことにきちんと言及した点は評価できます。

ただ、教材の中で、COVID-19感染の防止と「交通ルールを守る」こととの関連がわかりづらかったです。また、年長児に「エッセンシャルワーカー」を理解させることは難しい設定だったのではないかと疑問を持ちました。

COVID-19感染症の激しい流行によって、社会経済活動を支える観点から再び保育施設の存在意義と保育者の役割が注目されていますが、子どもの命と健康を守る観点からこうした啓発活動の継続を期待します。

評者：高木 早智子

「いのちをまもる」というテーマに沿った健康教育を、法人内のプロジェクトとして行った本報告は、「ありがとういのちマン」の動画や紙芝居のオリジナル性が高く、内容としても高い評価に値します。法人内の系列21園を網羅したこの取り組みは、他の園や複数園を運営する法人にとって非常に参考になると思います。実践研究発表の体裁も整っており、論旨も明確で、読み応えがありました。個人的に残念だったのは、集中していた(いない)子どもの人数や、出てきた言葉の内訳等をデータとして数値化することで、実践を目に見える形にして分析できたのではないかと思う点です。もちろん、各園での実施方法の統一や、子どもどののような状態を「集中している・いない」と定義するのかといったことも必要になりますが…。次回にはぜひデータの数値化にもチャレンジしていただければと思います。「いのちキラキラプロジェクト」の更なる飛躍をご期待申し上げます。

## 1人ひとりの個性やこだわりを大切にすること —子どものあそびへの関わりから見えてきたもの—

石川県・大徳学園 鶴見 京子・浅香 聡彦

### 1. 問題提起と目的

当園では3・4・5歳児の異年齢クラスを編成している。

従来の異年齢クラスのアソビは、子どもが主体といながらも大人主導であることが多く、クラスの中に1つのテーマを作っていく中で、そこにどうやって子どもたちを入れていこうかと考えていたように思う。子どもたちに話をする際も「これやってみない?」「これならできそう?」などと誘導的な聴き方をしていた。子どもたちにとっては自分の考えというよりは、やるかやらないかの選択だったと感じる。

しかし近年、子どもを集団の1人ではなく個として大切にしたいとの思いから、1人ひとりの子どもたちが何を考え、本当にやりたいことは何かを知りたいと思うようになった。そこで子どもの話や考えを尊重することで、どんな変化が生まれるか実践を考察し、そこから得られる課題についての改善点も考えてみたい。

### 2. 方法

該当クラス3歳児11名、4歳児9名、5歳児11名と担任保育者の日々の活動実践を記録した上で考察する。子どもの名称はアルファベット表記で5歳児は5とする。(例、T男4・R子5)とする。また、担任保育者は3名で第一筆者の鶴見と保A・保Bとする

#### <実践1> 運動会・小綱奪いでの作戦会議 9月中旬

当園の運動会は3クラス対抗で金・銀・銅のメダルをかけて争う、子どもたちにとって力が入る行事の1つである。目指せ金メダル!と5歳児が中心となって取り組んでいて、それが受け継がれている。例年は親子競技もあるが、今年度はコロナ禍ということもあり、子どもたちだけで行うこととなった。そのため、得点の入る競技やそのルールについて3クラスの5歳児が代表として話し合いをして決めることになり、その結果、小綱奪い・ボール送り・年齢別対抗玉入れ・5歳児のリレーをすることになった。

小綱奪いのルールは以下の通りである。各クラスで3・4・5歳児が1チーム9~11名となるチームを3つ作り、合計で3回対戦する。

綱は3種類で、子どもたちの意見から3点と1点の綱は園にある綱と縄跳びとなったが、得点の大きい5点の綱は自分たちで作りたいと言ってきた。一昨年に運動会

で使用した実物の大綱を見て、「こんなの作ろう!」と太さにこだわりを持ち、5点の綱は各クラスでロープと毛糸を編み込んで作るようになった。つまり、5点と3点の綱は太さで差をつけ、3点と1点の綱は長さで差をつけるということである。5歳児からクラスみんなに、綱によって点数が違うこと、1チームごとに対戦し取った縄の点数が多い方が勝ち、少ない方が負けになることを説明してもらい、3チームに分かれることになった。

その後、Y男5が昨年運動会で園庭に万国旗を飾っていたのを覚えていたようで、家で国旗のイラストを万国旗風に書いてきた。それがクラスに広がり、他の子どもたちも様々な国旗をクレヨンや絵の具、マジック等で書き部屋に万国旗のように飾っていった。「どの国が好き?」などと子どもたちで好きな国や国旗の話をしていたので、チームの名前も少人数の子どもたちに聴きながら人気の世界の国の名前にすることになる。5歳児の数人とのやり取りで形や色が人気のアメリカ・日本・スウェーデンチームにすることにした。子どもたちに全体の話し合いの際にこの3つの国にすることを伝え、納得しているように見えた。

クラス内で何度か実際にやってみることで、ほとんどの子がルールを分かってくるので、他クラスと練習試合をすることもあった。初回の練習試合では他のクラスに負けてしまったが、翌日に再度対戦するので、鶴見の働きかけで、クラスみんなが集まる時間にチームごとに作戦会議をすることにした。丸く輪になってから5歳児が中心となって話をし、そこに4歳児も意見を言っていく。3歳児は聴きながらどう進んでいくか見ているといった感じであった。

男の子が点数の高い太い綱を取りに行ったらいいと考えるチーム、5歳児と4歳児が太い綱を取りに行ったらいいと考えるチーム、綱を引っ張って持ってきたらその間に後ろから誰かに取られるかもしれんから、クルクル巻いて取ってきたらいいと考えるチームなどさまざまだった。その際、チーム内で意見が違い、「男の子がみんな太い綱を取りに行ったら他の綱どうするん?」と男の子の意見に女の子が反論し、時に言い合いになったり、3歳児が考えたクルクル縄を持ってくるということがなかなか上手く伝わらず、理解してもらえなかったりする場面が見られた。そんな時は鶴見や他の担任が輪の中に入り、「みんなはどう思う?」と周りの子に投げかけたり、「それってこういうことかな?」と補足をしたりするこ



とで少しスムーズに話が進んでいった。また、保育者がどうなるかしばらく様子を見ていると、意見が合わない時は、「じゃあ男の子全員じゃなくて分かれて取りに行くのはどう？」と中間をとって話してくれたり、上手く折り合いがつけられない時は、他の子が「じゃあ、それでやってみる？」と言ってくれたり、話を聴いてくれないとわかると「話聴いてないとわからなくなるよ」

などと伝え合ったりする姿が見られた。

それぞれの意見を聴くためにチーム内の意見や決まった事を発表してもらった。チームごとの考えに触れることで、太い綱を狙っていくのがいい方法なんだと感じたり、縄を取る時の新たな方法を知ったり、それぞれが他のチームの意見を聴いて実際やってみたり、大きい綱を取りに行く方法を改めて考えたりしているチームもいた。



(小綱奪いの練習)



(5歳児が作った5点の太い綱)



(チームごとの作戦会議)

### <考察1>

普段のあそびの中では、どんな素材を使うかどんな形に作り上げるかなどは少人数で話し合うことはあったが、そのあそびに興味のある子だけで行っていたので、あまり話し合いを経験していない3歳児も数名いた。クラスみんなが同じテーマで話し合うことは今年度初めての経験だった。鶴見自身、それぞれが興味や関心が違う中で、みんなが同じテーマで話し合うことの重要性を感じていなかったこともあり、今までやっていなかった。しかし、運動会はみんなと一緒に取り組む大切な行事で、5歳児の子どもたちの気持ちの高まりも感じていたので、みんなに参加してほしいと思い、クラスみんなが集まる時間に全員で話し合いを行った。何かを話し合う時は「○○会議」と名称を付けていた。それは昨年度から『子どもかいぎ』の絵本を読み聞かせして、話し合う際に子どもたちに「会議するよ」と声を掛けた際、子どもたちが張り切って参加する姿が見られたので使うようになった。そして子どもたちと共有してきた。4・5歳児は年齢活動で何度も経験があるため、会議となると3歳児に誘いかけ自然に丸く座っていた。

できるだけ子どもたち同士で進めていくことがねらいだったが、3・4・5歳児の9～11人の集団だとかな

か意見が合わない時もあり、時間が経つにつれて3歳児が騒ぎ出してしてしまうことがあった。また、違う意見で言い合う場面や考えていることが上手く伝えられないこともあった。そういう時は保育者が援助しなければと思ってすぐにまとめようとしたり、先走って意見を言おうとしたりして関わっていたが、しばらく様子を見ることで、子どもたち同士が考え合い、5歳児中心にその場に合った言葉をかけ合っていること、子どもたち同士が様々な性格の友だちを認め、分かって話し合っていることに気づいた。子どもたちは、自分の意見を話すことも大切だが、違う人の意見を聴き、自分の気持ちに折り合いをつけることも大切だと感じていたようだった。

また、「今の言い方は伝わりやすいね」「わかりやすい」「そうやって気づいたことを伝えられるの素敵だね」「伝えてくれてありがとう」「話し聴いてもらえるとうれしいね」などと、上手くいった成功体験はその後必ず子どもたちに返すようにしていた。

今年度、みんなでお話し合うという初めての経験だったのに、作戦会議という難しいテーマにしてしまった。チームの名前も少人数の興味のある子たちに話を聴いただけで3つの国に勝手に決定してしまっていた。初めはもっと簡単で時間が短く、3歳児でも話しやすいものを取

り入れたらよく、チームの名前を決めることを会議に取り入れていけばよいと後から気づいた。そうすると自分のチームという意識がより持てたのではないだろうか。

### <実践2> 万国旗から世界へ 10月

運動会終了後も、部屋に様々な国旗を飾っていたこともあり、本を見て、国旗を絵の具で描いてみたり、様々な玩具で表現したり、地図の絵本を見ながらいろいろな国の食べ物・衣装・動物、有名な物を調べたりしていくようになった。

夏ごろからのあそびで、子どもたちが考える様々なところに行ってみよう！という話から、部屋には段ボール製の飛行機が出来上がっていた。その飛行機と国旗や国の興味が重なり合い、飛行機に乗って世界の国へ行きたいという子が出てきた。鶴見の「飛行機に乗ってどこに行きたい？」の問いかけに、Y男5、R子5、C子5がイタリアに行ってみようかと話だし、それを実現するためにクラスみんなに聴いてみたいと言ってきた。

昼食前のクラス全体の話の時間にみんなの前に出て、Y男5が「イタリアってこんな国旗ねん」、R子5とC子5が「イタリアってピザとパスタがおいしいよ」「ピザ食べたい!」、3人で「みんなでイタリア行きたいんだけどいい？」と話す中、クラスのみんなが賛同した。3人はとても嬉しそうにしていた。そしてイタリアの世界づくりがスタートする。



(地図の本で国のことを調べている)



(みんなの前でイタリアのことを説明)

### <考察2>

子どもたちがクラスみんなに意見を言う際にどんな風に伝えようか、どうしたらみんなが賛同してくれそうかを考えている姿が見られた。本や図鑑を持ってきた方が分かりやすいと考えたようで、伝える力がついてきた。工夫して相手に伝える姿が、クラス全体に広がったらいなと思うと同時に、その姿を認めていきたいと思った。

ただ、なぜ急にイタリアが出てきたのかをずっと考えていた。9月の鶴見の誕生会の時、子どもたちから「行きたい国はどこ？」という質問が出て、「イタリア!」

と答えていた。そのことが関連しているのしか考えられず、身近な大人の言動が子どもたちに大きく影響することを改めて感じた。

### <実践3> 飛行機・イタリアピザ 10~11月

イタリアに行くことが決まり、飛行機とピザ屋さんづくりをすることになった。「大きいたくさんみんなが入る飛行機を作りたい」と真っ先にT男5が言う。飛行機づくりの援助は保Aに担当してもらう。T男5、M男5、A男5、K男5、M子4、S子4が参加し、話し合い始める。子どもたちの話を聴きながら、保Aがイメージを設計図に書いてみる。昨年子どもたちの中で虹色は特別で、虹色を様々な機会に使ってきており、こだわる子が多数いた。T男5が「虹色やったら、積木はたくさん色があるから積木がいいんじゃない?」とみんなに聞く。みんな賛同し、積木で作ることになる。機体の前の部分はM子4が「段ボールで作って絵の具で虹色にしたい!」と言ってくる。機体が丸いのに段ボールは角ばっているので作る際にどうするか考えていた。ハサミで切り込みを入れて丸くし、上手く飛行機の形にしていた。

運転席にはA男5が「椅子を作りたい」と言う。K男5も一緒につくると言い、O男4と3人で作り出す。A男5が頑丈にしたいと欲していたので牛乳パックに新聞紙を入れて作ることにする。根気よく新聞紙をたくさん入れて固く頑丈に作り上げていた。積み木の色合いなども保Aが子どもたちと一つひとつ聴きながら進めていく。途中からは、3歳児の積み木の好きな子が集まり、一緒に積んでいた。



(積木で飛行機づくり)



(飛行機に乗って出発)



(運転席の椅子づくり)

ピザ作りは鶴見が担当する。Y男5、R子5、C子5を中心にどんなピザにするかを決めていった。R子5が、「ピザはかまどで焼きたい」そして考えながら「ピザって焼く時は1枚だけど食べる時って切って食べるよね、どうしよう・・・」と話し始める。

Y男5が「切ってあるのでいいじゃない？」と言うと、R子5が「でも焼く時バラバラになってかまどで焼く時、焼きにくいよ」「できんくない？」と話しながら、どうすればいいか迷っている。教材室に一緒に行き、素材を見ていく中で、1枚になっている円形フェルトに綿が入っているものを見つける。R子5が「下にこれ敷いて、

その上に切ったピザをのせるのとかどう？」「そうしたら焼く時にバラバラにならんし、食べる時は切っているから食べやすいんじゃない？」と話す。Y男5が「ホントや、それいい、そうしよう」と賛同し、C子5が「上に乗せる切ったピザは三角でちょっとふわふわにしたいから、あの白いつも使っとる綿入れたい」と言ってくる。Y男5が「トッピングはトマトとハムと入れたい」「トマトとハム切ろう」と、好みのフェルトを手に取り「トマトは丸く切って、ハムは細く切る」とイメージを伝えていた。他の素材も教材室にある素材や布を見て、輪になって決めていた。



(ピザの素材選び)



(手作りピザの完成)



(ピザ屋さんで食事)

### <考察3>

子どもたちの話を聴きながら進めていくことでよりイメージに合ったものが出来上がっていった。意見を出し合いながら、「それだったらこうなるしもっとこうした方が良くないじゃない？」と子どもたち同士で伝え合いながら進めていけたように感じる。素材を何にするか、やり方はどうするかなど、子どもたちのイメージ通りに応えていくことで子どもたち自身が考えたものが形になっていく。その過程を経験することで自信となり、やる気や集中力にもつながっていた。何より楽しいと感じられるものとなった。

しかし、やりたい、やってみたいと言ってくる子たちの話は聴くことができ、一緒にアイデアを出し合いながら進めていけるが、そのほかの子たちについてなかなか話を聴いてあげられない現状があった。決まった事に興味を持ち、意欲的にやってみようとするのももちろんいいと思うが、日々保育する中で疑問に感じていた部分である。

当園では毎日ポートフォリオ<sup>(注1)</sup>という形で毎日の子どもたちの様子を掲示している。クラスのおそびの内容が中心で、決まった子がよく掲載されるという問題点もあった。特に3歳児は大きなおそびの中心にならないことが多く、保護者には日々どんなことに興味を持っているのかがなかなか伝わりづらく、課題であった。

### <実践4> 発表会にむけて 11月中旬

ピザ屋さんが開店し、飛行機に乗って旅に行くのと同時に、世界の様々なことに興味を持った子どもたちからたくさんのつぶやきが聞かれていた。

新たに、世界の民族衣装・世界の料理・世界のお祭りの本を部屋に置いたことで、子どもたちのイメージの幅が広がっていった。また、「この国の食べ物ってどんなのかな？」「この国の洋服ってどんなのかな？」など、子どもたちの疑問をすぐに調べられるようにタブレットを常時部屋に置き、保育者が入力することで、いつでもすぐに調べられるようにした。また、民族の踊りやフラダンスの曲などに興味を示していたので、動画を見ることにも活用していた。

当園では、12月に行われる発表会は部屋で盛り上がっている興味を持ったものを表現することがメインとなっている。発表会では世界のことをしたいということが5歳児の中で大きくなっていったようで、それに刺激を受け4歳児や3歳児も同じように考えていたようだった。発表会についての全体的話し合いの場では、「私フラダンスやりたい!」や「忍者する!」などと子どもたちから声があがり、世界のことをすることになった。発表会では1人ひとりのその子らしい表現を大切にしたいと思っていたので、改めて子どもたち1人ひとりにどんなことをしたいか聴いてみた。「どんなことに興味がある?」「なんか好きなことある?」「やってみたいことは?」など

と個別で聴いていく。

Y男5はイタリアの民族衣装を着たいと自分のイメージした衣装を絵に描き、素材や色を決め作り始めていた。スカートは民族衣装の絵本のイメージと同じ赤の不織布で長さも足首が隠れるロングスカートにしていた。自分で長さを合わせ、プラスチックの針と毛糸で縫い付けていく。それを見て興味を示し、4歳児や3歳児でも作り始めようとする子がいた。

C子5はハワイのフラダンスをしたいと言い、フラダンスの衣装を本で調べて、気に入ったもののデザイン画を描いてみて、作り始める。どうしても水色で胸から足までのロングワンピースに5段のフリフリを付けたいとのこだわりがあった。作るのは難しいがフリフリをどうしても諦めきれず、裁縫上手な祖母にお願いするという選択をした。

N男5は、世界の地図の絵本を見ながらアフリカのカメレオンになりたいと言う。カメレオンの色にこだわりを持ち、絵の具を何色も調合し、思ったのと違うともう1度作り直し、色が近づいてくると、少しずつさらに配合していき、真剣な表情で色を作り出していた。不織布に色を塗るという選択をした子が今までいなかったが、こだわって絵の具を塗っていく。絵の具が染みて下が絵の具だらけになるが、N男5は自分でやるといったので後始末までしっかりしていた。妥協せずやり遂げたことで満足のいく、イメージに合ったものになった。

また世界の地図の絵本を見ながらK男4やD男4がメキシコの楽器や帽子を見て「こんなんやってみたい」「こんな帽子かぶりたい」などと話し、同じくインディアンになりたい、忍者になりたいと次々になりたいものが決まっていた。

友だちが衣装を作り試着しているのを見て「かわいい！着てみたい！」と言い出したり、仲の良い子が忍者と決めると「一緒にする！」とやる気になったりと、年上児や友だちの影響でやりたいことが見つかっていく子もいて、次々とやりたいことが明確になっていった。

何がいいかな、何がやりたいかなと迷っている子も数人いた。その子たちには、得意なことを生かしながら表現することを提案してみた。F男4は国旗や国の食べ物

に詳しく、何かわからない国のことや国旗のことは、F男4に聞けば何でもわかるとみんなが思い、一目置かれていた。子どもたちからは国旗博士と呼ばれていたので、国旗博士を勧めてみた。するとF男4は「できるかな？」と少し自信がなさそうだったが、R男5に「F男4は何でも知ってるから博士や。だから大丈夫や」と言われ、F男4は国旗博士をすることになる。自信がなさそうなS男5やE男5には、国旗のことに興味がありそうだったので、話を聴いてみると国旗の意味などを調べたいという話になり、それを話してもらうこととなる。それと、発表会を進行するために必要なナレーターを勧めてみたところ、2人一緒なのでやってみようということになった。

そして、みんなの役が決まり、発表会は世界の様々なことを表現することになる。子どもたちのやりたいことやイメージしたものを、より細やかに表現するために、担任3人で担当を決めることにした。

当園では、運動会や発表会の際、部屋の前にその経過が分かるようにドキュメンテーション<sup>(注2)</sup>を掲示している。保護者は毎日増えていくドキュメンテーションに興味を持って見てくれ、「家でも話を聴いてみます」と子どもたちとの会話のきっかけになったり、「こんなこだわり持ってやってるの初めて見ました。すごい！」と子どもたちの育ちの気づきになったりしていた。また、家でセリフの練習をしたいと言ってきたので、鶴見が台本を作ると、「家族みんなでセリフを練習しています」「なんかできることあったらいつでも教えてください」と保護者からたくさんの協力の申し出があった。

#### 発表会の配役

国旗説明・中国・ナレーター…5歳児3名・4歳児1名  
日本忍者…5歳児1名・4歳児3名  
メキシコ楽器…5歳児1名・3歳児4名  
アフリカ…5歳児1名・4歳児2名  
ハワイ…5歳児3名・3歳児3名  
イタリア…5歳児2名・4歳児2名・3歳児1名  
アメリカ…4歳児1名・3歳児3名



(民族衣装の本からイメージを膨らませる)



(イタリアとフラダンスの手作り衣装)



(カメレオンの色を調合)

#### <考察4>

多くの子どもたちが、発表会で自分のしたいことを自信を持って言葉にして伝えてきていた。友だちと一緒に決めた子ももちろんいるが、自ら考えて自分の得意なこと好きなことをやってみたいと決めていった。

また決まらない子や、自信がなくて迷っている子に対して、友だちが声を掛けたり、大丈夫と励ましたりしていて、保育者以外の言葉も子どもたちの自信や前向きになる力となっていた。

担任3人が、それぞれ責任を持って担当することで、個々のこだわりがより表現でき、1人ひとりが考えている細かい部分まで把握して援助できていた。保育者同士毎日増えていくドキュメンテーションを見て、子どもたちの姿を共有し、子どもたちがこんなことを考え、こんなことにこだわりを持ち、こんな力を持っていると子どもたちをみる目が肥えていった。また日々振り返りがしやすく、子どもたちの気持ちが高まっていることを実感していた。

保護者とはドキュメンテーションを通して子どもの姿を共有することから、共感につながっていった。子どもたちの意欲や保育者の援助が保護者に伝わり、保護者共々一緒に発表会に向かって進んでいるようだった。

#### <実践5> それぞれの国の表現はどんなふうにする 11月下旬

1人ひとりが表現したいことは決まり、それに向かって作ったり練習したりしていたが、発表会でどんな風に発表していくかは決まっていなかった。5歳児にその国のリーダーとなってもらい進めていくことにする。5歳児の11名は意欲的ですぐに引き受けてくれた。リーダーにどう進めていくか、どんな風に発表していくかをチームで相談していくように話してみる。5歳児が発表会のことを一番イメージでき、みんなのことをより理解していると考えたからである。また、リーダーを任せることで自ら考え責任を持って進めてほしいと思ったからだ。1つだけ4歳児と3歳児だけのところがあった。そこは鶴見が4歳児と共に一緒に考えていく。

チーム内でどんなふうに表示したいか、曲はどうするか、セリフはどんな風にするかを話し合っていく。フラダンスチームではC子5が曲を決めたいと言ってタブレットで何曲も聞いていく。みんなで一緒に聞きながらいい曲があると、他の子たちに相談し「この曲がいいんだけどいい？」と聞いていた。

舞台や遊戯室へ行き、動きやセリフを決めていく際も、5歳児と3歳児が大体3名ずついたので、セリフはR子5 C子5 N子5が「私たちセリフ言える！衣装の紹介したい！」と主になることになる。H子3も「セリフを言いたい」と言ってきたので、「作った衣装のお気に入りの部分を紹介するセリフ言ってみる？」と鶴見が提案すると、「言える」と言った。R子5が「順番にセリフ言

っていこう」「それに並ぶのも太陽さん（5歳児）と星さん（3歳児）と順番ずつにしよう。入る時その方が星さんわかりやすいし」と3歳児を気遣い決めていく。踊りの時もR子5が「みんなで並ぶと狭いし、太陽さん上の段に行くのはどう？」とやりやすい方法を提案して決めていた。

他のチームも5歳児が中心に決めていきながら、4歳児や3歳児に「こんな風だよ、できる？」と確認したり、「一緒にやってみる？」と聞いたりしていた。

保育者間は、毎週のクラスミーティングで担当している国の進捗状況を共有していく。子どもたちの思いを汲み取ってする際、1人ではなかなかアイディアが出ない時に担任同士と話し合うことで、より選択肢が増え、また知識がない部分を補っていた。

#### <考察5>

チームとしてどのように表現していくかについて、5歳児の子どもたちはすぐに賛同してくれたので、これまでの経験で自信がつき、なんでもやってみよう！と感じられるようになってきていると感じた。一方で5歳児と限定せず、4歳児にも声を掛け意欲的な子には一緒に参加してもらう方法をとっても良かったのではないかと考えさせられた。また4歳児だけのところは5歳児に相談して分担してもらおうとも考えたが、子どもたちの好きなことを表現してほしいだったので、そのままにした。

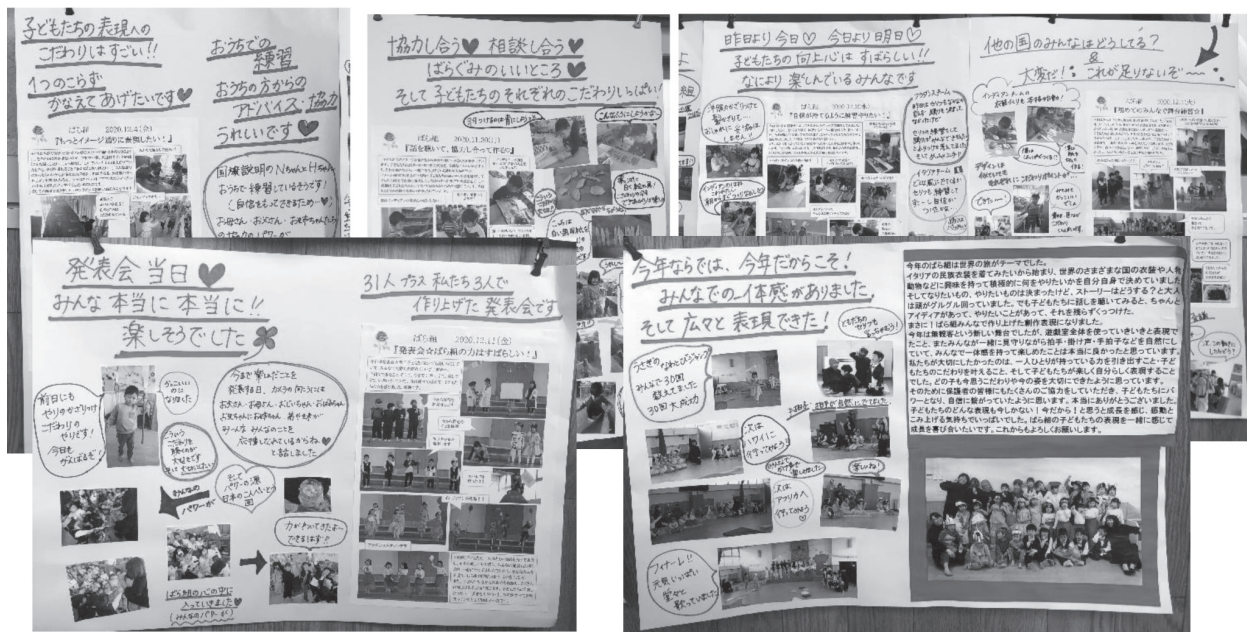
#### <実践6> 発表会 12月中旬

コロナ禍のため、運動会同様発表会は観客なしで行われた。例年は遊戯室の舞台上で表現するが、観客がいなかったので遊戯室全体を使うことになった。これまでは舞台の周りは暗幕で覆われ、発表を待っている子たちは何をしているのか見ることはできなかったが、幕を使用せず、みんなが見えるようにした。

発表会当日は各チームが団結していた。一緒に集まって座り支え合いながら、遊戯室全体を使って表現・行動していた。5歳児は「一緒にいくよ」「こっちやよ」と誘導したり、リーダーとして先頭に立ったりして取り組んでいた。

また、子どもたちがどのチームの発表も見ることができ、見守ったり、掛け声をかけたりすることで一体感を感じていた。「アロハー」「ボンジョルノ」の各国のあいさつは、みんなが自然に共有していて、練習を重ねるたびに、一斉に大きな声を出して掛け声をかける様子が見られ、当日も同様だった。

発表会の様子は業者の撮影が入り、保護者には後日配信された。ドキュメンテーションでは「楽しかった！」「またやりたい！」と言っていたことや、当日の様子を提示し、子どもたち1人ひとりの表現、今のその子らしさを大切にしまとめた。



(発表会ドキュメンテーションの一部抜粋)

## <考察6>

今年度は、遊戯室全体が使えるというメリットを生かし、子どもたちはチームのメンバーの様子を見ながら、ダイナミックに表現することができた。曲決めから踊りや動きなど、自分たちで話し合いながら、決め進めていたのでそれが自信となり、より一層楽しんで表現できたのではないだろうか。また、各々が何が好きで何にこだわっているのか知っていたので、それぞれの表現を認め合いクラスが1つになったようだった。緊張感はなく、みんなが楽しそうだったのが印象的だった。

## 3. おわりに

子どもたちがどんな風になりたいか、どんなイメージなのかを聴いて、あそびを進めていくことで、自分の意見を言葉にする機会が増え、どんなことでも言ってみようと感じたり、自分の思いを言葉で表現したりすることが増えていった。そして、みんなの前で話すことを楽しむようになったり、相手に伝えるために工夫したりする姿が出てきた。

また、少人数での話し合いを繰り返してきたことで、たくさんアイデアが生まれ、子どもたち同士が刺激し合い、折り合いをつけながらいろいろなことを決めていけたように思う。時には考え方や意見が違う中で、なかなか自分の気持ちに上手く折り合いがつけられず、トラブルになることもあったが、それを何度も経験することで、関わり方を学んだり友だち同士で支え合ったりしていた。

今年度は、クラスの保育者と連携しながらコーナー担当を決めることで、より深く子どもたちの思いを聴くことが出来た。一方で、コーナーに入っていない子のあそ

びや育ちへのアプローチをどうするかという問題点も出てきた。それに対しては、3人の担任が同じコーナーに居続けるのではなく、コーナーの掛け持ちや、時に5歳児に任せてコーナーに入っていない子のつぶやきに耳を傾けたり、友達に誘ってもらったりして、コーナーのあそびにつなげていきたいと思っている。

子どもの話を丁寧に聴くこと、個々に向き合って援助していくことは時間がかかる。また、子どもたち1人ひとりの思いやイメージを尊重しながら、1から何かを一緒に作り上げていくことは容易ではない。子どもたちのこだわりや創造は、私たち保育者の想像を超えてくることが多く、それを保育者の安易な考えでつぶしてしまわないように、日々保育者自身が成長していかなければならないと思う。大変ではあるが、同時に保育の面白さでもあると思う。

保護者に対しては、子どもの姿を発信し共有し、互いに子ども自身を認めていくことは、子どもたちの内面的な成長に大切なことだと考える。毎日のポートフォリオでは日々のクラスのあそびや取り組みなどを記載するため、保護者には個々でどう感じ、どう考え、どうしたかなどの姿はなかなか伝わらないことも多い。課題となる個々の成長の姿について、0・1歳児は数年前から毎月個別ポートフォリオ<sup>(注3)</sup>を作成し保護者とやりとりをしていて、保育者と保護者、保育者間で子どもへの相互理解が進んでいる。現在2・3歳児も期別の個別ポートフォリオを作成することにし、4・5歳児も段階的に作成予定である。それによって保育者自身が子ども理解を深め、その個々の育ちを保護者そして他の保育者とも共有できるのではないかと考えている。

(注1)

ポートフォリオとは、A4用紙1枚に写真付きで毎日の保育の様子を示すことをいう。週案に対応して記録することが多いが、子どものつぶやきや思いがけない子どもの行動やあそびについてのものもあり、制約はない。

(注2)

ドキュメンテーションとは、運動会や発表会といった行事や大きなテーマのあるあそびについて、時系列で子ども達の学びの様子を写真付きで紹介したり、保護者懇談会でパワーポイントや動画を使って説明したりして保育を可視化したものをいう。

(注3)

個別ポートフォリオとは、A4用紙1枚に写真付きで個別の成長記録を示すことをいう。保育者と保護者とのコミュニケーションツールの1つである。相互理解が進み、保護者からコメントをもらうことで、振り返りと計画案に反映させている。

講評：1人ひとりの個性やこだわりを大切にすること  
—子どものあそびへの関わりから見てきたもの—

評者：小林 芳文

問題設定や目的が、はっきりとした大変良い実践研究でした。

保育・教育分野では、どうしても命令型のスタイルが多くなりがちですが、この研究は、大人主導の活動でなく、子どもに問題提起した実践研究で、子ども一人ひとりの個を大切にす、尊重する保育のあり方に迫った、意義ある興味ある取り組みとして拝読しました。また、それぞれの実践事例での分かりやすさ、展開のすばらしさから評者を引き付けるものがありました。実践1の保育から実践6までの展開に、子どもたちの意欲や創造性、自発性などの生き生きとした姿が読みとれました。各事例のそれぞれにも写真の添付があり、そこに簡単な説明も加えられているため効果的な資料となっていました。不足していると思う点は、そこに根拠に基づいたデータ等がなかったり、各実践を束ねた全体の考察がなかったことです。これらがあるとさらに良い研究になると思います。

評者：石川 昭義

子どもを個として大切にしたいとの思いから、子どもの話や考えを尊重することで、保育にどのような変化が生まれるかをまとめた実践記録です。子どものやりたい気持ちを尊重し、子ども一人ひとりの思いを丁寧に聴きながら保育を進めることの大切さと難しさが表現されています。同時に、異年齢児保育の難しさに挑んでいる様子も大変参考になります。

保育の展開においては、子どもの発想をより具体化していくために、本、図鑑、タブレット、世界の地図の絵本をタイミングよく配置したことが

うかがえます。子どもの考えをイメージどおりに応えていきたいという保育者の思いが伝わってきました。

「おわりに」では、「子どもたちのこだわりや創造は、私たち保育者の想像を超えてくれることが多く、それを保育者の安易な考えでつぶしてしまわないように、日々保育者自身が成長していかなければならないと思う。」と述べられています。とても良い言葉だと思います。

報告では、3歳児の姿があまり描かれていないように見えました。「個として大切にしたい」思いが、異年齢児保育における3歳児に対してどのように関わっていたのかについて考察が進むことを期待したいです。

評者：田和 由里子

3、4、5歳児の異年齢での保育実践をされていました。子どもたち一人ひとりの思いを引き出し保育活動に取り入れていくことを目的として書かれていました。運動会の競技種目に始まり、そこには「万国旗」という飾りがあり、「万国旗」から外国への興味がわき発表会の演目へと発展している様子が伝わりました。保護者に対しても日頃から使用しているポートフォリオやドキュメンテーションを活用して丁寧に説明をされていました。異年齢保育の難しさもありますが、年齢ごとに絞っての報告があれば良かったと思います。例えば3歳児は異年齢の中でどのように変化してきたのかをまとめられても良いと思いました。

縦割り保育の良さも今後の研究課題として取り組まれて行かれることを願っております。